

続 4 回目のポーツマス

3 月 13 日 (火)

今朝、ポーツマスのハーヴァー・ステーションからヒースロー空港へ直行のバスに乗り、3 時間後の 2 時過ぎにホテルに入りました。あちこちで乗客を拾っていくために、まず、空港とは反対方向のサウサンプトンに向かったのですが、港が見えて嬉しかったです。メイフラワー号が新大陸に向かう時、このサウサンプトンに寄港して補給しており、何か記念碑があるそうなのです。

ポーツマスを離れる 2, 3 日前に対岸のワイト島を見ようと海辺に行きました。そこには記念碑がいくつかあるのですが、オーストラリアへの旅立ちを記念するものは以前見ていましたが、今回、目立たない記念碑を見つけました。1587 年 4 月 26 日に、**Sir Walter Raleigh** が、ここから 91 人の男性、17 人の女性、9 人の子供たちをアメリカのノースカロライナ州に送り出したことが書かれていました。アメリカではじめてのイギリス人村を作ったのですが、1587 年から 1590 年の間に消滅してしまい、彼らに何が起きたのかわからず、今も **Lost Colony** として謎なのだそうです。ネットで調べると、ちょうどそのころスペインの無敵艦隊と戦争中で、アメリカに補給の船を送りだせなかったそうです。

さらに、ネットには、**Raleigh** によって 1584 年に送りだされた入たちは、定住ではなく、黄金を見つけての帰国が目的であったこと、先住民に大量の食物を要求したため、関係が悪化したことなどが紹介されています。

今まで、1620 年のメイフラワー号がイギリスからの初めての移民船だと覚えてしまっていて、私の歴史認識は単純すぎました。メイフラワー号の前に、入植が失敗に終わった例がいくつかあって当然ですよ。また、初期の移民たちの緊張、閉鎖性を想像し、ホーソンの『緋文字』の世界を思い出しました。



ワイト島から帰ってきたフェリー

昨日、ゴードンさんにお別れの挨拶に行ったとき、この話題となり、ゴードンさんも 1587 年の移民船に関心を持っておられました。

「ここ、ポーツマスは大勢の人たちをオーストラリアに送り出したのですよ。犯罪人ですね。アメリカにもですよ。そして明日はあなたを東京に送ります」

私はアハハと笑いましたが、本人は知らん顔しています。してやったり、という顔はしません。これがイギリス人のユーモア・センスなのかもしれません。

最後の一週間は、フェデリカと待ち合わせてマヤのお迎えをして、保育園の様子が分かって嬉しかったです。一昨日は、保育園を出ようとしたときに、男の子が走って来て、マヤにハグをして、また、さっと走っていきました。あ、やんちゃ坊主と言われているアイザック君だな。満面笑みのいたずら好きそうな顔。時々みんなを困らせるそうだけど、私は大好きになりました。くるくるとした髪の毛のアフリカ系の男の子でした。昨日は父親がフェデリカの同僚である中国の女の子、モーイとマヤが「カエル」になって遊んだり、マヤの自転車のハンドルをモーイも握って、二人で自転車を動かしていて、小さい子供たちの交流に心と和みました。

「マヤ、卵からヒヨコが孵っていたね。ヒヨコたちは何を食べていたの？」

これには答えず

「ヒヨコは食べ物の上を歩いていたんだよ」

3月17日（土）

帰りの飛行機の中で、映画、**Darkest Hour**（邦題「ウィンストン・チャーチル」）を見ました。どちらかと言うと嫌われ者だったチャーチルがドイツ軍に劣勢のイギリスの首相となり、議会、国民を、犠牲を覚悟して最後まで戦うという方向で、まとめていく過程が描かれていました。政敵の一人は「彼は言葉を“総動員”して戦地に送った」と述懐してしまし

た。

国民をある方向に向かわせるという点では、イギリスは本来、難しい国なのでは、と思っています。それだけにチャーチルは偉大だったのだと思います。他方、オリンピックに国中が熱狂できる国では、政治にこのオリンピック的要素を加えたならば、はるかに簡単に一方向に国民を走らせるのが可能では？南京陥落のとき、ちょうちん行列があったそうな・・・と思いました。ある日の新聞では、オリンピックは24ページのスポーツ記事の中でたったの2ページ、社会面でオリンピックが登場したのは、ゲイを容認する社会になるようにとの意図で、ゲイの選手が競技後、恋人（男性）と抱擁している場面紹介の写真でした。

3月24日（土）

6週間のポーツマス滞在を振り返ると、私は存在感の薄い“奥ゆかしい”日本人だったなあ、と思います。マヤが私のことを怪訝に思っていたのも無理ありません。3週間が経ったころ、マヤから“Do you like me?”と聞かれました。そう言えば、私は、“I love you.”“I like you.”などという甘っちょろい表現は気恥ずかしくてしていませんでした。夫婦間でもこの表現は日常的にされていると聞いてはいましたが。また、私がマヤにお土産としてあげたおもちゃをマヤは私が東京に持って帰るものと思い込んでいたのは、到着した時、たくさんの日本食品を冷蔵庫に納めることに集中してしまい、どさくさに紛れてそのおもちゃがマヤの手に渡ってしまったからのようです。マヤは、私が滞在中に遊ぶために持参してきたおもちゃだと思い込んでいました。「これ、プレゼントよ」「これマヤにもってきたのよ」という言葉を発しなかったのです。「Sharing is caring.が分からないパーちゃんだ」とため息をついて言われたのも、私のパンをマヤのお皿に黙って置いておいたからだ、気付きました。ちゃんと「マヤ、このパンをあげるね」と言わねばならなかったのです。私は、どなたかに何かを差し上げる時、自分をできるだけ小さく見せたい、自分の存在感が大きくなりたくないという思いになり、声も小さくなります。言葉を発しなければ意図が通じない文化圏だったのに、舌足らずだったのです。

日本人は自分の存在感が大きくなりたくないよう自己規制しがちなのではと思います。ドイツに対し劣勢のイギリスを率いるチャーチルを映画化した“Darkest Hour”で、チャーチルが地下鉄に乗って庶民の意見を聞く場面がありました。乗客は、チャーチルだと気が付いて、「私は～～です」と名乗ってから意見を言いました。私なら「名乗るほどの者ではございません」と言いたくなかったのでは、と思いました。その乗客たちは、名乗ることによって、存在感が出てきました。“その他大勢”ではなく、それぞれの人の生活感、人生までが感じられ、個人の魅力が引き出された素晴らしい瞬間でした。また、意見を、匿名ではなく、自分の名前とセットで言うことの重みを感じられました。チャーチルも、議員を説得するとき、「地下鉄に乗っていた～～さんはこう言いました。また～～さんの意見はこうでした」と名前を挙げながら、庶民の意見を披露しました。「国民の意見は・・・です」ではなくて、名前を挙げたことで説得力が出てきました。

日本の市民運動がなかなか広がっていかない理由の一つに、自分の存在感を大きく見せたくないという日本人の”奥ゆかしさ”があるのではないのでしょうか？「名乗るほどの者ではございませぬ、意見を言えるほどの者ではございませぬ」という気持ちの市民が多いのでは？

今回、時には自分の存在感を大きくしなければならぬ、と自覚したことが一番の収穫でした。

(2018年3月25日 律)